

地下書庫をめぐる冒険

分館運営委員会 副委員長

根本志保子 教授

(環境経済学)

大学の図書館で研究に必要な書籍を探すことを「図書館で本を掘る」と呼んでいる。専門性の高い文献や論文は地下書庫にあることが多かったし、膨大な資料鉦山のどこに「お宝」が眠っているか、たとえ事前に目星をつけていたとしても、実際には掘り進めないとわからないからである。多くの場合、地下書庫は暗く湿っており、誰もいなくて、目的の書棚にたどり着くのに迷う。大学院時代の図書館は、小さな書室がつぎはぎでつながっていて、らせん階段や中階（立つのがぎりぎり）の部屋を上がったたり下がったりしながら、書籍番号を頼りに通り抜ける。映画『薔薇の名前』（1986）に出てくるあの迷路と興奮は（ネタばれになるので詳細は割愛して）、文字通り知のラビリンスにおいて、忘れ去られた「お宝」を自分だけが発見する冒険なのである（閉館？ぎりぎりまでねばってご心配いただくのはショーン・コネリーも私も変わりません…）。

1999年のこと、必要なある研究書の1899年出版の原書を手にとった。経済思想書だったと記憶する。その書籍には、1939年の男性の貸し出し記録が書かれていた。100年間で、借りたのは私で2人目ということになる。60年前、太平洋戦争直前に、こんなすぐには社会に役に立ちそうにない本を借りた人は、何を知りたくてこの本をとったのか。書籍は生き延び、一方、おそらく大学の先輩だと思われるその人はどうなったのか。鉦山洞窟の中で突然、数十年前にそこを通過した探検隊が壁に残した落書きを見つけたような、そしてこの書籍に次に誰かが触れるのは50年後かもしれないと思うと（書籍保存の必要性が問われますね）、私はしばし書棚の間の脚立にすわり、この100年のリレーに思いをはせ、当時から続く知の空気を味わってみた（完全に妄想です）。

今はインターネットの便利な検索システムがあり、論文は自分のパソコンでダウンロードでき、他図書館の書籍も取り寄せればカウンターで簡単に手続きできる。文献探索にかかる時間は格段に減った。本当にありがたい。それでもときどき図書館の地下書庫に本を掘りに行く。地下は閉鎖的で、古い書籍はざらざらし、湿ったにおいがして、生きているものの世界ではない。なぜかとてもくたびれる。それでも図書館地下書庫は鉦山なのだ。目的の書籍を抱えて地上に生還する。そこは明るく、人がいて、もう本当に閉館です、心配していました、とねぎらってくれ（いつも迷惑をかけてごめんなさい）、生きた社会につながっている。本当は、選鉦して精練して、社会に役立つ大論文に磨き上げられればよいのだけれど、今も掘るばかりで大量のぼた山を積み上げ続けています…。

